難波田城だより

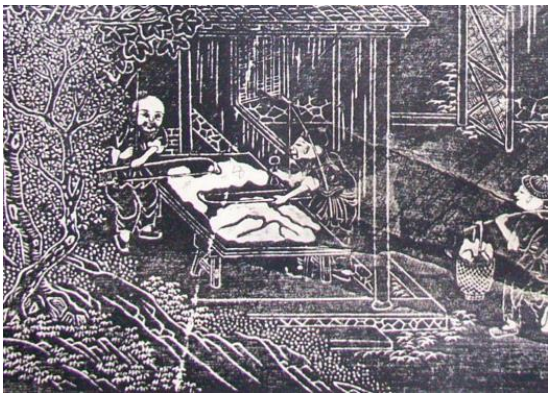
―難波田城公園・難波田城資料館ニュース―

2014年　春号　（通号59号）
NEWS from NANBATAJO
編集・発行/富士見市立難波田城資料館

綿を育て糸を紡(つむ)ぐ

市民学芸員　清水　澄子

小学校での糸車教室



『綿花図』より打綿図方観承

新しい年が明けると、公園内で木綿に関する活動を行う私たち資料館友の会木綿部会は、とても忙しくなります。市内の小学校へ出前授業に出かけるからです。一年生は、国語の授業で「たぬきの糸車」を学習します。罠から助けてくれたおかみさんのために、おかみさんが山を下りて不在の冬の間、たぬきが、かわりに糸を紡いだ、というお話です。たぬきのように、糸車を使って、糸紡ぎの実演をするのです。子ども達は、私が初めて糸紡ぎを見て驚いた時のように、目を輝かせ見入ります。綿の種を蒔き、育て、綿花を収穫し、綿(わた)くり、綿打ち、糸紡ぎ、糸を草木で染め、機織(はたお)り、と布になるまでの気が遠くなるような流れの一端を学ぶのです。

始めて自分で紡いだ糸を、植物染料の蘇芳(すおう)で染めて、横糸として織った布は、帆布(はんぷ)のような厚さで、とてもがっかりしました。私の糸が太かったり細かったり、均一でないことが問題なのですが、和綿の性質も大いに関係しています。公園内の長屋門前で育てている綿は、和綿で、花屋に売られているものの大半は、洋綿です。綿の繊維を比べてみると、和綿は短く、弾力があります。そのため布団綿に向いています。木綿が日本で普及し始めるのは、江戸中期で、各地に木綿産地が生まれます。昨年、伊勢参りのついでに立ち寄った松阪も、三河と共に一大木綿産地でした。そのため『伊勢は、見渡す限りの綿の畑』といわれています。また、〝七つ八つから糸たてなろて（習って）いまに糸屋の嫁になる…という里謡(りよう)があるそうです(1)。子どもの時から均質な細い糸を紡ぐためにどれだけの習練が必要だったかと思います。

けれども短繊維であることと、唐弓(とうゆみ)で綿打ちした毛羽の多い、不均質な太糸で織った布は、どうしても厚地です。上図は中国、清朝初期に描かれた木綿糸作りの工程を示した作品の一部ですが、ここでも、唐弓のようなものが用いられています。

一方、その後、イギリスの産業革命により、紡績(ぼうせき)機械が発明されると、長繊維の洋綿からは、細く均質な糸を作ることが可能になりました。この糸で織られた軽くて緻密な薄地の織物は、瞬く間に和綿の織物を駆逐していきます。安政６年(1859)横浜が開港されると、川越やその周辺地域の織物業者は、イギリス糸と化学染料に関心を持ち、全国に先駆け、これらを導入しました。従来から産物であった川越唐桟(とうざん)はこれにより、より人気を博し、川越の富の礎となります。この糸と染料は、新河岸川の舟運を利用し運ばれ、引又河岸(志木市)で荷揚げされ、運ばれたものもありました(2)。

私達の生活の身の回りは、化学繊維が多くなり、綿100%の衣料は、夏のＴシャツや、タオル、肌着等でしょうか。それとても、原料はほとんど外国産です。綿がどこで摘まれ、糸となり、製品となったか、想いを巡らせ、昔の人のように大切に使いたいと思います。

参考文献(1)田畑美穂 1988 『松阪もめん覚え書』中日新聞本社　(2)川越織物市場の会編 2012 『川越商都の木綿遺産』さきたま出版会

市民学芸員のページ　＊このページは市民学芸員（広報担当）が原稿を執筆、編集しました。

こんなお宝がありました　資料館編

「水害舟」（上げ舟）

昨年十月に下南畑にお住まいの方から先祖伝来の水害舟が当館に寄贈されました。これで、当館で展示している水害舟は２艘になり、いずれも資料館と城跡ゾーンを繋ぐ橋の南側に展示されています。

水害舟は「上げ舟」とも言われ、舟運等に使われるのでなく、平時は写真のように、納屋等の軒下に舟底を上にして吊り下げて保管していました。資料館でも２艘あるうちの１艘を吊り下げて展示することになりました。実際に人力で吊り上げると、数人の共同作業となりました。つまり、水害舟を常備していたことから、往時の家族構成あるいは区域の共同作業を想定してみることもできます。

戦後、下南畑では大きな水害が無く、実際に使われた時のお話は聞けませんでしたが、長期間使用しなければ当然乾燥して隙間ができますから、いざと言う時は予め軒から下ろし、水につけて浸水対策をとっていたそうです。

水害舟は江戸時代から南畑地区で使用されてきた記録があります。災害に備える先人の知恵ということができます。（西尾勉）

舟をつるす場所作りも数人での共同作業です。

現在はこのように展示。下２艘のうち１艘は舟運関係の舟。

おもしろ・なつかし体験㊸

扇だこづくり

このコーナーは、難波田城公園での体験事業やイベントの紹介・報告・参加者の感想などを取り上げます。

扇だこは江戸時代末から明治初年に作られ始め、川越やその周辺で広く普及していました。扇だこの創始者は富士見市上沢（かみさわ）出身の大曽根（おおそね）龍造氏です。扇だこの製作は、昭和に入り一時途絶えましたが、保存会が結成され、現在では当資料館を中心に活動しています。その扇だこづくりの講習会が昨年の 12 月 14,15 日に当館で行われ、さらに今年の１月 11 日には凧あげ大会が行われ、私も参加しました。

扇だこは真竹（まだけ）から「ひご」を作り、麻により結び目なしの骨組み（麻を骨と骨の交点に巻き付け、糊で固める）を行います。そして、和紙を貼った上に墨と染料で絵柄を描き完成させます。

扇だこの特徴はその形と、左右に風袋（かざぶくろ）があることです。扇の形は末広がりを表し、縁起の良いものとされ、左右の風袋があることによって弱風でも飛ばすことが可能になっています。

今回の講座は８名の方が参加しました。麻の巻き方や、絵柄の仕上げには大変苦労しましたが、保存会の方の丁寧な指導のおかげで、きれいに仕上げられました。ただ、凧あげの際は、風がほとんどなく、大変苦労しました。凧は天高くとならず、不完全燃焼でした。次回には天高く上げ、童心に戻れる体験ができればと思います。

（村江近人）

和紙を貼っていきます

あがりましたが…

人の創った道具★人の使った道具

耕地改良と農業の機械化

～春季企画展「田んぼ今昔-耕地改良のあゆみ-」(H26/3/8～6/8)より～

このコーナーでは、当館所蔵の資料を紹介します。今では使われなくなった道具からわたしたちの身近な歴史をひもといてみたいと思います。

耕地整理事業で湿田から乾田へ

富士見市は、都心から最も近くに水田地帯が広がるまちの一つです。この地域で稲作が始まった 2 千年前から少しずつ水田を広げましたが、大河川（荒川と新河岸川）に近い低地であるために水はけが悪い「湿田」が多いことや、形や広さがさまざまだったことから、農作業は楽ではありませんでした。現在のような整備された「乾田」が整然と並ぶ田園風景は、明治時代に始まった耕地整理以降に人びとの手により造られました。

富士見市域で初めての耕地整理事業は、明治 44 年（1911）から水谷村の柳瀬川流域で行われました。前年の大水害がきっかけでした。

南畑村の耕地整理事業は昭和 17 年～20 年（1942～45）に行われました。やはり前年 16 年（1941）の水害がきっかけとなりました。

両村とも耕地の区画整理をし、道路・用排水路を新設することで、湿田は乾田に生まれ変わりました。

乾田化による農作業の変化

乾田になると、農作業の内容はかなり変わりました。大きく変わったのは次の点です。

まず、裏作が可能になり、稲作に加え、小麦・大麦・ジャガイモ・菜種などの農作業が増えました。

また、土が硬くなったため、耕すための道具が変わりました。人力で用いる田うないマンノウは刃が鋭いものを使うようになりました。牛馬に引かせる馬耕機を使う家も増えました。

田うないマンノウ2種
乾田用（全体写真左、刃写真上）と湿田用（全体写真右、刃写真下）

田植え後の除草では、多くの家では手作業でしたが、乾田では除草機（田打車など）を使うようになりました。

農地交換分合の啓発ポスター

交換分合で農地集団化

乾田化により稲の生育が良くなり、収量が増えるとともに裏作の収穫が増えたので、経済的には改善されました。しかし、それぞれの農作業が楽になった反面、裏作のために作業量は増え、春と秋の農繁期が目の回るほど忙しくなりました。

除草機２種-田打車（左）とカブマトリー（右）

そこで、南畑村では合理化を図るため交換分合を実施しました。点在する農地を交換して集団化（隣接地にまとめる）したのです。南畑村の交換分合は埼玉県下では模範的な事業で、実施後は国内外から調査や視察が相次ぎました。

先駆けとなったのは鶴新田地区（下南畑）です。昭和 24 年（1949）に土地改良法が制定される前の 23 年（1948）に 26 軒中の 16 軒で実施したのです。25～26 年（1950～51）には南畑村全体で取り組みました。

交換分合で進んだ機械化

交換分合終了後は農作業の機械化が進み、近隣地域の中では際立った先進地となりました。鶴新田地区では昭和 24 年（1949）に「畜力利用実演研究会」を組織し、農機具の導入に力を注ぎました。全戸数 25 軒の農機具の浸透状況は次のとおりで「著しいものがある」と報告されました（『埼玉県農地改革の実態』）。「電動機 18 台、発動機 1 台、脱穀機 19 台、自動耕耘機 3 台、培土プラウ 1 台、ナタハロー8 台、カルチベーター6 台、水田除草機 3 台、牛 13 頭」。「機械化」といっても昭和 30 年代までは畜力が主体でした。（駒木 敦子）

砕土機（ナタハロー）
荒起こしの後の田に水を入れ、2～3 日後に牛に引かせた。

＊＊＊春のイベント予定＊＊＊

●企画展情報

春季企画展「田んぼ今昔(いまむかし)ー耕地改良のあゆみー」

富士見市は都心から最も近くに水田地帯が広がるまちの一つです。水はけの悪い湿田(しつでん)を乾田(かんでん)にしたり作業しやすい水田にするため、農家はさまざまな耕地改良（耕地整理や交換分合など）を行ってきました。明治時代から近年までの取組みを紹介します。

会　期／3 月 8 日(土)～6 月 8 日(日)
会　場／特別展示室
入場料／無料
主な展示資料／水谷村耕地整理の絵図・写真、南畑村耕地整理基本調査図、交換分合啓発ポスター、当時の民具(ミズグルマ、スイコ)など

企画展関連講演会「田んぼ今昔(いまむかし)、そして未来へ」

大都市に近い土地での農業のあり方を、現役の稲作農家の方に語っていただきます。

と　き／3 月 15 日(土) 午後 1 時 30 分～3 時
ところ／講座室
定　員／30 人(申込み順)
参加費／無料
講　師／柳下春良(はるよし)氏（地元農家）
申込み／資料館に直接又は電話で

企画展関連イベント
新作オリジナル紙芝居『作べえ堀』上演会

江戸時代、下南畑村の作べえさんが伊佐沼(川越市)から用水堀をつくったときの話を、紙芝居にしました。自転車紙芝居で他のお話も上演します。

と　き／3 月 29 日(土) 午前 11 時～11 時 30 分
ところ／旧金子家住宅　　**定員**／なし
参加費／無料　　**協力**／わんだー民話らんど
申込み／直接ご来場ください

「田んぼ今昔」を歩こう

企画展に関連した場所(南畑地区)を歩きます。5 月 24 日開催。詳細は広報ふじみ 5 月号をご覧ください。

●ちょこっと体験「昔の着物を着てみよう」

野良着や羽織などを着て、ちょっと昔の気分を味わってみませんか。子ども用も大人用もあります。

と　き／3 月 29 日(土)・30 日(日)
午後 1 時～3 時　　※2 時 30 分受付終了
ところ／講座室
参加費／無料
申込み／直接ご来場ください。
※順番待ちをしていただく場合もあります
協　力／和道文化着装協会

●鶴瀬駅の写真大募集

今年 5 月に鶴瀬駅が開設 100 周年を迎えます。これを記念して写真展「鶴瀬駅の 100 年」を開催する予定です(鶴瀬公民館・西交流センターと共催)。

鶴瀬駅や駅周辺の昔（おおむね 20 年以上前）の写真をお貸しいただける方がいらっしゃいましたら、難波田城資料館、または公民館か交流センターにご連絡ください。

その他、園内の田んぼで稲作の一連の体験ができる「田んぼ体験隊」の参加者の募集は 4 月から始まります（市民限定)。5 月には、本物の鎧(よろい)を着られる「よろいを着てみよう」など様々なイベントを行います。
※各イベントの詳細は、広報ふじみやポスター、チラシ、公式サイトなどをご覧ください。

●ちょっ蔵市

（難波田城公園活用推進協議会主催）

3 月 23 日（日）　草もち
4 月 27 日（日）　かしわもち
※時間は午前 11 時から。売切れ次第終了です。

●難波田城公園まつり

6 月 1 日（日）に開催します。

〈開園時間変更のお知らせ〉

4 月から 9 月の間、公園の閉門時間は午後 6 時になります。資料館と古民家は午後 5 時までです。

難波田城(なんばたじょう) FUJIMI MUNICIPAL MUSEUM
編集・発行／富士見市立難波田城資料館
〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑 568-1　TEL. 049-253-4664　Fax. 049-253-4665
富士見市役所公式ホームページ　http://www.city.fujimi.saitama.jp
◆資料館休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(土・日・祝日を除く)、年末年始　開館時間／午前 9 時～午後 5 時
◇公園休園日／なし　開園時間／午前 9 時～午後 6 時（4 月～9 月）　午前 9 時～午後 5 時（10 月～3 月）